

おてんとさん

私が子供の頃、両親や祖父母からよく「おてんとさんが見ている」と聞かされていました。「おてんとさん」とは、太陽の神様のことで、親しみを込めた呼び名だそうです。幼い頃、「おてんとさん」の存在を感じる時は、ほぼ悪行が清算される時でした。良いことは、どうやら貯金されるらしく満期になると清算してくれる様です。あくまでも、私の勝手な想像です。

昔は「おてんとさん」程ではなくても、いつも近くで子供達を見てくれていた校外の先生がたくさんいました。帰り道で会うお婆さん、畑仕事をしている人、近所の人、皆先生でした。危ない所で遊んでいると「危ないよ。怪我するよ」とか、暗くなっても遊んでいたら「お家の人が心配するから早く帰りなさい」とか声をかけてくれていたものです。当時の私には、優しくも厳しく見守ってくれる校外の先生も「おてんとさん」同様、無くてはならない存在でした。

どんな小さな悪行でも隠し通し穏やかに過ごすのは至難の業です。その事を「おてんとさん」や校外の先生たちが存在するからだと行いたいのは無く、人を従らに傷つけたり迷惑をかけたたりする行いは、必ず自分に返ってくるのだと私は理解しました。祖父母や両親もそう教え伝えたかったのだと思います。しかし、校外の先生は社会の変化と共に少なくなっていました。こうなってしまう今、「おてんとさん」や学校の助力を得ながら、家庭での道徳教育により一層尽力する事が少なくとも我家の課題だと感じています。

八年目からの抱負

仕事柄、インターネットで調べ物をする機会が多く、毎日のように新しい言葉と出会う。最近、目に止まったもの一つに「育児は育自」というキャッチフレーズがあった。なるほど、子供の養育は親としての自分を成長させる。法律的に大人と認められる年齢になって久しいが、父親になってからはたった七年間しか経過していない。この年月でどれほど成長できたのだろうか。

なにぶん、初心者の父親だから、事あるごとに右往左往している。「意志の疎通ができるようになれば、少しは楽になるのでは」と期待したが、決してそんなことはなかった。日々、自分の未熟さが浮き彫りになり、就寝前のため息については反省する。

特に難しさを痛感しているのは「叱る」ことだ。どうしても無意識にイライラをぶつけてしまう。感情のコントロールができずに「怒る」のは子供である証拠だろう。睨みつけたり声を荒げたりして周囲に不快感を撒き散らすのは本当に良くない。冷静に相手のためを考え、教え諭すことこそ、唯一の「叱る」道である。しかし、理解はしていても、なかなか実行できるものではない。

十八世紀のフランスの哲学者・随筆家であるジョゼフ・ジュベアは、著書の中で「教えることは二度習うことである」、そして「子供には批評よりも手本が必要である」と書いた。どちらも真理であり、親として求められる姿勢に通じる金言だと思う。

子供の成長は驚くほど速く、父親の成長は呆れるほど遅い。八年目からは些細なことで目くじらを立ててガミガミ「怒る」のではなく、元気で楽しく過ごせるように見守っていきたい。

文理小学校にお世話になって思うこと

それぞれの8歳

早いもので、娘が文理小学校に入学して二年が過ぎようとしています。私は文理小学校の卒業生ではありませんが、文理高校を卒業したということもあるのでしょうか、三年前の学校説明会に参加させて頂いて以来、その後の入学試験、そして入学式以降の学校行事の全てにおいて、文理小学校に来る度に何か懐かしいものを感じ、私自身とても学校行事を全て楽しみにしておりました。

理事長先生は私が高校生頃からお変わりなく、バイタリテイに溢れており、また熱心な先生方から教育を受ける娘は、じわじわ増えていく日々の課題とも闘いながら、確実に日々成長させて頂いております。また、入学前には学校生活における親同志の付き合い方についても少し不安がありました。文理小学校においては、妻と子どもストレスを感じることなく過ごすことができております。

このように、順調な小学校生活を送らせて頂いておりますが、私ども家族の都合で残念ながら娘は文理小学校を離れることになりました。「転校」というのは七歳の小学生にとっては大きなストレスだったようですが、少しずつ受け入れが出来つつあるようです。今回の転校が娘にとってよい経験になるよう祈るばかりです。

文理小学校を離れることはとても寂しいですが、娘にとって文理小学校は母校の一つであります。これからも先生方から受けた指導や友達と過ごした思い出を忘れず、新天地で更なる成長をしいと願っています。

「おめでとうございます。元気な女の子ですよ。」あれから8年を迎えました。出産と育児にはこれ以上ない幸せがあった反面、想像を超えた忙しさや苦しみもありました。子供を感情的に叱つたり、育児情報を見ては不安になったりと、自分は一人前の大人ではなく、未熟な母親であることを思い知らされました。けれど大抵の悩みは、耳を傾けてくれる人がいて、気づけば母親としての経験へと変わっていました。目まぐるしい日々の中で、何を優先させるのか、誰に助けを求めるのか、心穏やかに過ごす工夫など、知恵や教訓の模索が今も続いています。

一方、娘はたくさんの家族に囲まれてすくすくと育ちました。登園時「ママと一緒がいい・・・」と私の後ろで隠れて泣いていた娘は、よくしゃべり、友達を大切に、活発な子に成長しました。預かり教室へ迎えに行くと、エレベーターが到着する前から、友達や先生との笑い声が聞こえてきます。日々の報告は、クラスメイトと楽しく過ごす姿を想像させてくれます。彼女の底抜けに明るい性格とバイタリテイが私をいつも元気づけてくれます。

親子で乗り越えるべき課題が尽きることはありませんが、彼女が彼女らしく大きく羽ばたくことのできる環境づくりを大事にしながら、一緒に取り組んでいきたいと思えます。「負うた子に教えられて浅瀬を渡る」、それぞれの人生を楽しみながら、苦しみながら、共に成長していける親子でありたいと考えています。

将棋を通じて学べること

ひと夏の成長

将棋には「ひふみんアイ」という言葉がある。プロ棋士の最高位である名人にもなった加藤一二三九段（最近はタレントとして活躍されている。）が、タイトル戦の時、休憩時間にわざわざ相手の棋士の側に回って反対側から自分の陣形を見た時に素晴らしい一手を見つけたことが語源である。加藤九段ほどの実力者であれば、頭の中で盤面をひっくり返して考えることなんて何でもないことである。わざわざ立ち上がって相手棋士の方に回りこんで反対から見ても同じと思う方が普通だ。しかし、加藤九段はそれを実践して勝利に結びつく一手を発見した。

このように頭の中で分かっているつもりでもさらに相手の立場で見て考えることで、自分の陣形の良い点や悪い点に気付いた。このため将棋の解説では、画面に映る盤面の上下をひっくり返して逆の立場でみてみることを「ひふみんアイ」と呼んでいる。「相手の立場にたって物事を考える」

これは将棋に限った話ではない。仕事や人間関係でも何事にも通じることだと思う。加藤九段の場合、名人でもそれを追究したことで新しい発見につながった。

息子も将棋のルールを覚えて私と指すようになった。私が本気を出せばまだ負けないが、そのうち私が勝てなくなるだろう。そのときには息子も「ひふみんアイ」の言葉の意味が分かるようになっていと思う。そして、将棋だけでなく、学校生活や社会の中で「相手の立場にたって物事を考える」ことができるようになってもらいたい。

昨年の六月の終わりに、初めて息子の水泳のテストの送り迎えをした。スイミングスクールで行われるテストだが、息子は小さなころから週に一度スクールに通っているので、今回は、バタフライの五十メートルである。

テストは、二十人ほどが二班に分かれて行われる。次々に泳いで、それをそれぞれの班の担当コーチが採点し、合否を決める。息子の順番がきて泳ぎ始める。バタフライのはずなのだが、どこかおかししい。両腕は確かに体の横でくるくる回って水をかいているが、胴体が水面から余り上がっていない。「これバタフライ？」などと思いつつ眺めていたら、案の定不合格だった。

約二カ月後の九月の初めに息子が再びテストを受けることになった。今度も私の送り迎えになった。

息子が泳ぎ始めた。途端に「アレっ」と思った。胴体が水面から力強く持ち上がっている。ところが、二十五メートルを折り返すと、「イ」の形になっている。ところが、二十五メートルを折り返すと、胴体の持ち上がり徐徐に小さくなってきた。バタフライは相当疲れるものらしい。それを五十メートルも泳ぐのはなかなか大変なのだろう。最後は、心の中で「頑張れ」と繰り返し続けた。

なんとか恰好を保って泳ぎ切りはしたものの、息子の採点をするのは、「バタフライのテストは殆ど通さない」という伝説の鬼コーチである。「今回もだめかな」。親の私が諦めムードで待っていると、息子はニコニコしながら着替えて出てきた。合格である。子どもは短期間で成長する。実感させられたひと夏である。

私の目標

「自信の信は人に言う」と書く。達成したいことを自分で考えるだけでは簡単に諦めてしまえるが、いろいろな人に話すことで後に引けなくなり、頑張らざるをえなくなる。そして努力を積み重ねることで自信につながっていく。」

これは、今年西武からメジャーリーグに移籍を決めた菊池雄星投手が、小学生に夢を持つことの大切さをテーマに講演した時の言葉だ。彼は高校時代からメジャーリーガーになると目標ノートに書き、いろいろな人に伝えていたとのこと。目標を一つ達成し、自信に裏打ちされたであろう堂々とした表情が印象的だった。

近ごろ、忍耐力、自尊心などを含む、非認知能力を高める教育の重要性について伝える本や記事をよく目にするようになった。私自身、今でも自信のないことに挑戦するのは二の足を踏んでしまう。自分ではできるといふ自己肯定感が底辺にないと努力し続けるのは難しいというのは、今までの私の経験振り返ってもその通りと思わされる。

娘は、二学期の課題で「ドリームツリー」を作った。目標とする職業につくまで、一年ごとに達成すべきことを年表と作文にし、菊池投手のように人に発表する機会をえた。あとはどれだけ粘り強く自分を信じて目標に向かっていけるか。十代でも伸びるといわれる非認知能力が培われる土台には、どんな時にも自分を肯定してくれると信じられる家庭環境が重要らしい。彼女が転ばないようにという親心からとはいえ、否定や口出しをしすぎた自分を反省し、後ろから見守っていききたい。

君へ

それはまだまだ残暑が厳しい九月下旬のことだった。夜から始まった陣痛で妻は緊急入院。定期的に襲ってくる痛みに疼く妻も、付き添っていた私も、一睡もできずに朝を迎えた。私たち夫婦が指示を受けて分娩室に入ったのは午前七時を過ぎた頃だった。やがて汗びっしょりとかいた妻が最後の力を振り絞る――。

「！」
午前七時二十四分、室内に甲高い声が響き渡る。君はありったけの声を出し、その、とても小さな手に、いっぱい夢と希望を握りしめて、私たちに愛らしい姿を見せてくれた。

あのときのことは今でも鮮明に覚えている。私たちが初めて親になった瞬間。そして私たちにとってまきれもなく人生最高の日。あれから十年の月日が流れた。まだまだ幼くて甘えん坊の君だけど、随分と身体も大きくなった。これから楽しいことや嬉しいこともあれば、辛いこと、悲しいことも体験するだろう。でも、君には明るい未来が待っている。君の目の前には無限の可能性が広がっている。これからも自分を、周りの人を大切に、感謝の気持ちを忘れず、誠実に、真摯に、一生懸命、生きて欲しい。え？ もうすぐ始まる反抗期で私たちを困らせるぞ、って？ そのときは、君がどれだけ歓迎されてこの世に生を受けたのか、どれだけ多くの人に愛されてきたのか、しつこく語ってあげよう。そして、最後に伝えておこう。

私たち夫婦を両親に選んで生まれてきてくれて、本当にありがとう。

家族の宝

一措一画

「二人一緒に大きくなっていいね。」
今まで何人の知人から聞いた言葉だろう。私はその言葉の意味が理解できずにいました。

双子の息子達を授かってから、家族が一度に増えた喜びと想像を絶する息子達との子育て紛争に我が家の生活は一変することになりました。子育ては肉体労働とよく耳にしますが、何でもどんな些細なことでも同時にしなければいけないということがこんなにも難しいことだったのかと痛感しました。

小学校に通い始めてからは、息子達のパワーは二倍いや、四倍にもなっているように感じます。小さく生まれた彼等ですが、心も身体も成長し、周囲から様々なことを日々吸収しています。彼等が話す日常生活の話題に、情景が目には浮かぶようで自然と笑みがこぼれます。そんな毎日がとても温かく、息子達との時間は私にとってなくてはならないものになっています。

高学年になって、私自身が息子達に助けられることも増えたせいか、よく耳にしたあの言葉「二人一緒に大きくなっていいね。」を今さらながら思い出しました。彼等の成長を目の当たりにして、やっとその言葉の意味が分かって始めてきました。一人っ子の私には到底理解し難い絆が彼等にはあります。ライバルであり、友達でもあり、ケンカもするけど仲の良い兄弟でもある。一分違いで誕生した二人が残りの小学校生活で更に成長するのがとても楽しみです。今後、成し遂げたい目標に向かってそれぞれが歩んでいく姿を見守っていききたいと思います。

公職選挙法が改正され、投票できる年齢が十八歳以上に引き上げられました。息子も十一歳となり、初めての投票を経験するのにも間近でしょう。

息子がプリントに自分の名前を大雑把に書く姿を見て追懐するのは、彼からすれば高祖母になるサダのことです。私が生まれた頃にはすでに泉下の客となっていたサダ、しかし末流の語るサダは人一倍教育熱心で五ツ玉の間屋そろばんを弾きながら、

「算術ができたかったらなんぼ働いても給金を騙くらかされるんじゃない。私も女学校に行きたかったけど農家に生まれたけん、裁縫に使う反物も用意できんけん片身がせまいわな。女学校はみんなが憧れとう学校なんじよ。」

そう口にしていたそうです。婦人の着物から帯まで一式を揃えたら家長の一月月の給金が飛んでいった時代でした。

昭和二十一年になり、女性に初めて参政権が与えられました。漢字は僅かしか書けず普段は片仮名を常用していたサダですが、投票の折には新聞の切り抜きを手を目当ての出馬者の漢字を指でなぞり、一措一画を間違えぬよう記入していたといえます。

たった一筆に願いを込めるサダの姿は今も私の胸裡に生きています。いつか息子にもサダという誇り高い尊属がいたことを敬慕し伝えていかなければなりません。

息子には今一度、自分の名前と向き合ってほしいのです。丁寧に自分の名前を書いてみてください。自分の書く名前は、今の自分を写しているのです。

受援力を持つ

子育てという未知の世界に入って早十二年。最初は全く思い通りにならない育児に軽い産後うつになった。早く仕事復帰したのも、どこかで気分転換しないとダメになりそうだったからだ。後で知ったが、そのような状態は生真面目で頑張り屋の人がなりやすいようで、まさか自分がそんなタイプとは思いませんでした。

そんな時、吉田穂波さんという女医さんの「受援力のススメ」という講演を聞く機会があった。「人に迷惑をかけてはいけない」「人に頼る＝弱い」、「自己責任のもと」という考えのもとで頑張ることによって孤独になりエネルギーを奪われてしまう。受援力とは、ごめんなさいではなく、助かります、ありがとうございますという言葉で気持ちを伝え、助けてという力。頼むということは、相手を承認し、信頼し、尊敬するからなのだ。自分だけでやる！というオーラを出していると、確かに誰も声をかけてくれなくなるだろう。その頃から、「放課後少し、子供を預かってほしいな。」「本当にありがたい。」など、私もやっているうちに、自然といろいろな方が声をかけてくれたり、子供を預かってもらえたり、子供は大好きなお友達と遊べるのだから大喜びで出かけていくし、私は涙が出るほど嬉しかった。私の母に至っては、頼りすぎて週二回の夜ご飯の準備やお泊まりなど本当に頭が上がらない。

振り返ると、息子は祖父母やお友達、その家族、先生などたくさんの人に囲まれて、充分な愛情をもらい充実した六年間を過ごしたと思う。受援したものは、まだ全く返せていないが、私は全ての人に心からの感謝の気持ちでいっぱいです。

愚息の将来

愚息は精神的に未だ幼い。身体的な成長にも個人差があるように、成長さえ止まっていなければ問題はなく、要は最終的にどこまで成長するかこそが重要である。

彼は、これまでの短い人生の中でも様々な経験を重ね、両親や先生など様々な人から、知識とともに規範や価値観などを教えられ、自分の物として取り込んだ。次のステージは、様々なことを鵜呑みにして取り込むだけでなく、問い直し、自分なりのもを作りあげる時期、すなわち自我の形成期にいずれ至る。自我の形成には、これまでの周囲の価値観への懐疑、自立と依存の葛藤などの考え方に加えて、漠然とした自信と不安の揺れ動きなど感情での変化に、自分で折り合いをつける必要がある。

身体的な成長は遺伝子で規定された限界があるが、精神的な成長の限界は本人次第である。人は誰しも自分らしさを獲得する時期があるが、周囲に迎合したり、自分の可能性に見切りをつけたら、精神的な成長は止まってしまう。時には周囲との軋轢や自らの能力への不安が我と我が身を苛むだろう。安定を求めず、常に新しい自分への挑戦はなにも、思春期や青年期だけに限られない。時間はかかっても、小さく纏まるのではなく、粗削りでも大きく成長して欲しいと思う。

以前と比べれば現在でも、独創性や多様性を重んじる社会へと変容しており、未来は個性豊かに自由な発想でイノベーションを起こす機会があふれている。大器晩成ということもあるから、将来を期待して、これからの彼の成長を見守りたいと思う。